

年間第19主日

マタイ 14・22-33

高円寺教会 2017.8.13 9:30 ミサ

クラレチアン宣教会 うめざき たかいち 梅崎 隆一神父

マタイの福音書によると、湖の上で弟子たちが嵐に遭ったのは今回で2回目になります。一度目は弟子たちが載っている舟にイエス様も一緒にいるのですが、弟子たちは怖がります。そしてイエスは、「何故怖がるのか、信仰の薄い者よ」と言われています。今回は、水の中に沈みかけたペトロに対して「信仰の薄い者よ、何故疑ったのか」と言われています。恐怖と疑いというのは信仰の薄さに関係することが分かります。それに対して、「死にかかっている娘を救ってください」と主に願った異邦人の女は、「あなたの信仰は立派だ」と褒められています。「薄い」と訳されたギリシャ語を直訳にすると「小さい」となります。それに対して、異邦人の女が言われた「立派」という言葉は直訳すると「大きい」という意味になるそうです。では、わたしたちはどれほどの大きさの信仰を持てばいいか、それは以外に小さく、からし種一粒ほどの信仰です。いちじくの木に移動を命じたり、山を動かしたりすることができる信仰というのは、肉眼で見るとほこりのように見えます。信仰はそれぐらいの大きさで十分であり、異邦人の女の持っている大きな信仰と同じ大きさとなります。

弟子たちは、「主よ、あなたはメシアです」と信仰告白をしていたにもかかわらず、からし種一粒ほどの大きな信仰を持っていなかったことが、今日のエピソードでわかります。そして、その信仰は、まったく苦しみや試練のない人生を歩むことができることではなく、苦しみや悩みの中で発揮されるということもわかります。キリスト教の信仰は、神様が存在するかしないかを問題にしているわけではありません。神様が存在しているのは、わたしたちにとっては当たり前のことです。神様が人を救うことを信じる、これが信仰です。そして救いとは、人間がイエスと同じ神の子となることです。

今日、ペトロはそれにチャレンジしようと思い、「主を、命令して、水の上を歩かせてください」とお願いします。イエスが水の上を歩いているように、「そうか、わたしの信仰は神が救ってくださることであり、救いとはイエスと同じことができること。水の上をわたしも歩くことができれば、本当にそれを実現したと言えるに違いない」と思ったことでしょう。そして、イエスと同じ神の子として生きる決断をし、イエスと同じように水の上を歩こうとしました。でも、イエスの命令よりも、周りの強い風に気がついて怖くなり、ペトロは沈み

そうになりました。神のことばは、強い風や地震や火山の噴火の中ではなくて、そよ風の中にあると旧約聖書に書かれています。だから、この世の強い者の振る舞いや言葉ばかり気をしてしまうと、弱いわたしは神様のことばを聞いても、救われないのではないかと、神の子として生きられないのではないかと心配になり、沈みそうになります。しかし、弱い者、小さい者こそ神の国にふさわしいということの本気で信じるのなら、山を動かしたり、水の上を歩くことよりもっとすごくて大切なことを実現することができるかと確信することができます。

わたしたちはペトロのように信仰告白をして、イエスから与えられるパンによって飢えを満たし、社会に出かけていきます。そして、イエスと同じように生きる力が与えられているにもかかわらず、強い風に代表される大きな力学の前に沈みそうになってしまいます。しかし、神のことばが一度天から降るなら、それは雨のように大地をうるおし、命を与え、空しく天に戻ることはありません。わたしたちの働きも、人から気付かれず褒められないほど小さいからし種一粒程度のものかもしれません。場合によってはペトロのようにかっこ悪いことも何度もやらかすかもしれませんが、神の子を拝むだけではなく、神の子としてのわざを行うことができるというキリスト教の信仰を確信することができますよう、共に祈りましょう。